スマトラ、日本のNGO続々現地入り　診察や食料配布

2009年10月8日21時34分

ブログに利用する

巡回診療所で被災者を診察するAMDAの医師（中央）＝パダン、矢野写す

巡回診療所で被災者を診察するAMDAの医師＝パダン、矢野写す

【パダン（インドネシア西スマトラ州）＝矢野英基】スマトラ島沖地震の被災地で日本のNGOが活動を本格化させている。家を失った多くの被災者が今も厳しい生活を強いられており、医療面や、食料、日用品の提供などで生活支援をしていく方針だ。

壊れた住宅が目立つパダン市郊外のクランジ地区。国際医療NGO「AMDA」（本部・岡山市）が7日、空き地に巡回診療所を開くと、すぐに数十人の住民が来てせきや下痢などの症状を訴えた。

被災後、めまいや頭痛がするという主婦のモニカさん（30）は「地域の病院では症状が軽いからと見てもらえなかった。医師が近くまで来てくれると助かる」と話す。

AMDAは地震発生直後から2次にわたり日本人の医師ら7人を派遣し、インドネシアのNGOと協力して被災地を巡回診療してきた。骨折や外傷に加え、ショックによる頭痛やストレス、呼吸器系の病気なども目立つという。

「難民を助ける会」（東京都）は日本人スタッフ2人をパダンに派遣し、生活物資を届ける準備を開始。障害児が通う学校10校と協力し、約4千人に食料や生活物資を配る予定だ。ピースウィンズ・ジャパン（東京都）も2日から日本人スタッフ2人が現地入りし、魚の缶詰やカップめんなどを配った。現地の中長期的なニーズを調査する。